

教養としての日本人論

文筆家 東洋哲学・宗教学者 瓜生 中

1. はじめに

■「俺の目を見ろ何にも言うな」

「教養としての日本人」という本を今年の 2 月に出したのですが、今日はその中のごく一部のお話をしたいと思います。一般の日本人というのは国家意識とか民族意識というのが希薄です。逆に、それを濃厚に持っている人の中には、すぐ戦争をしたがる困った人たちもいて、太平洋戦争もそうした人たちが起こしました。国家意識や民族意識が希薄なのは、国境を接しておらず、異民族がほぼいなくて、同一の言語をしゃべり、ほぼ同一の生活階級を守っていることなどが理由でしょう。旅行に行っても思うのは、どこへ行っても大体同じようなものを食べ、日本語が通じることです。ところが例えば東欧諸国なんかに行くと、多民族国家ですから隣の村の人が全く訳の分からない言葉をしゃべり、食べるものも生活習慣も全然違うのです。前に「NO と言えない日本人」という本がヒットしましたが、日本人ははっきりものを言いません。同じ民族ですから、言わないでも心が通じるんですね。北島三郎の兄弟仁義に「俺の目を見ろ何にも言うな」という歌詞がありましたけれども、しかし外国では言葉が違うので、はっきり言わないとよく通じ合えません。

2. 豊かな国土で育った日本民族の特性

日本列島は北海道から本州、四国、九州、南西諸島と南北に並ぶ島が国を形成しています。列島は南北に約 3500^{km}、本州の一番幅の広いところは約 500^{km}、いちばん狭いところで約 300^{km}。面積は約 35 万^{km}平方でフランスの 2 分の 1 ほどの広さです。日本は狭いと言われていますが、ヨーロッパにはもっと狭い国がいくつもあり、世界的にはそんなに狭いほうではありません。日本列島のように島が点々と並ぶ国土を弧状列島と呼んでいます。北海道や東北は冬には極寒を体験しますが、列島全体としては温暖な気候で、日照時間も長く、降雨量も多い。国土の約 7 割を山地に囲まれていることから耕作面積は限られていますが、温暖な気候と豊かな日差しや降雨のお陰で作物は良く育ちます。

■野菜も魚も生で食べられる！

4 世紀に書かれた『宋書（そうじょ）』という中国の歴史書には、日本では根菜類や菜っ葉などの野菜が良く育ち、それを生で食べていると驚きの目を見張っていると記されています。日本では水と土壌が清潔で害虫や雑菌が付きにくく、生で食べても差し支えなかった。野菜とともに魚を生で食べるのも日本人独特の食文化ですね。日本では井戸や川や水道などの水を飲んでも支障がありませんが、ヨーロッパは硬水なのでそのまま飲むとおなかを壊します。フランスでは水に洗剤が溶けないので、洗濯機からお湯が出るようになっているそうです。

すでに弥生時代からコメを主食としており、それに魚や野菜などを生や煮たり焼いたりして食べていたと考えられ、早くから豊かな食生活を送っていたと考えられています。ただし、肉については鶏肉は別としてイノシシやシカなどの四つ足の動物の肉はあまり食さなかったらしい。

米作りが本格的に始まったのは紀元前 2, 3 世紀の弥生時代からで、静岡県登呂遺跡はまさに弥生時代のものです。日本人はつい近年まで四つ足の動物をあまり食べませんでした。私が子どものころの昭和 30 年代にも、一般家庭では食卓に肉はあまり上がってこなかったです。祖母の故郷の三浦半島に毎年行きましたが、ジャガイモやカ

余談 フランスでは水が飲めないため、小学生が遠足に行く時、水ではなくワインを持っていくので、若いうちからアル中になるとかならないとか。画家のユトリロは十六歳でアル中になったそうですが、母親からアル中の治療に絵を描きなさいと勧められて描き始め、世界的な画家になりました。手が震えてあの点描画がうまく描けたのでしょうか。

ポチャの煮っころがしばかりでしたね。近所の魚屋で豚肉を売っていて、焼いて食べさせてくれるんですが、とても硬くてアンモニア臭かったです。

■神さまに四つ足の肉はあまり供えない

神さまにお供えするのは米や酒、塩など生のものばかりですが、本来は調理してあげるものです。肉は鶏までは出ますが四つ足の肉を出すところは皆無に近いです。唯一出しているのは諏訪大社で4月に行われる御頭祭(おんとうさい)。菅江真澄という江戸時代の民俗学者が書いた遊覧記によると、イノシシや鹿やウサギなど30数種類の動物の首を供えたそうです。胴体は調理して神さまに供えたり氏子たちが食べたりしました。この風習は北海道のアイヌの熊祭りが下ってきたと思われます。また、愛知県岡崎市の神社では、元旦にウサギをぶつ切りにして汁ものを作り、みんなにふるまいます。平安時代の延喜式書物には、その土地で獲れる旬のものをありったけ供えなさいと記されています。日本人は、わざわざ大型の動物を捕えて残酷な処理をしなくても、野菜や魚で十分に賄うことができたのです。

このような豊かな風土の中で四季の移ろいを感じ取り、豊かな感性を育んできたということができるでしょう。川のせせらぎの音や鳥のさえずりを愛で、小さな草花の美しさを感じ取るのは日本人独特の感性と言えます。万葉集の額田王の歌にも風が吹いた時に秋を感じたと詠われています。イギリス人もこれに似た感性を持っていると思います。イギリスのジョージ・ギッシングという作家が、「ヘンリ・ライクロフトの私記」という随筆集の中で、「イギリス人はセロリをパリッと食べると本当の秋を感じる」「ベーコンエッグを食べるとイギリス人であることを痛感する」などと書いています。日本人も、正月のお酒や雑煮で日本人を感じたりしますから、共通点がありますね。ロシア人もそういう繊細な感覚を持っています。

3. 小さな社会の中で育った日本人

■一族は必ずしも血縁関係で結ばれてはいない

日本人の民族性は、古くから小さな社会の中で生活してきたことによって育まれてきました。弥生時代から稲作を中心に農耕を営んできた日本人にとって、一族とは農作業を共同で行う人々の集まりでした。その一族は必ずしも血縁関係で結ばれてはおらず、共同で作業を行う仲間です。その点、中国人の一族がすべて血縁で結ばれていて、そのような血縁的家族関係が儒教の根本をなしていることは事情が異なります。日本は明治以降、儒教精神によって国家を支配してきました。儒教は血族を大事にする思想ですから、日本の共同体意識とは乖離しているのです、いろいろ不都合もありました。

日本人は古くから小さなムラ社会の中で生きて来たので、血縁関係の有無を限らずムラビトは誰でも顔見知りで、家族構成や家族一人一人の性格などすべて心得ているのです。このことは平安時代の貴族社会も同じで、貴族はせいぜい千人くらいの間人が山に囲まれた狭小な平安京に肩を寄せ合っていました。ムラ社会から外に出ることは好まず、今でもその傾向は残っています。外部からの侵入を防ぐため、村落の境に塞の神、榊、道祖神、馬頭観音、庚申塚などが置かれていました。

これに対しヨーロッパ人は移動性牧畜民ですから、同じところにいると腰が落ち着かなくなる。日本でも大きなリュックを背負って歩いている外国人をよく見かけますよね。あの人たちは食べるものにこだわらず、毎日同じものを一年食べても平気です。ああいう人たちを戦争するとかないっこないんです。

■拾った財布を届けるのは美德じゃない？

日本では財布などを落とすとすぐに交番に届きます。日本人は正直な民族で、それが日本人の美德とされていますが、ムラビト根性が抜けない日本人は社会の中で自分が知られていることを知っているのです。財布を拾ってネコババすれば誰の仕業が分かってしまうから財布を届けるのであって、それは美德でも何でもないということが言えるのです。もし、届け出なければたちまち犯人は判明してひどいときには村八分などの重罪に処せられますから。

また、この社会では年功による序列がハッキリしていて、目上のものには決して逆らうことができない。要するに集団の中に埋没して、あくまでも大人しくしている人間が好まれて大過なく過ごすことができたのです。まさに「出る釘は打たれる」。そして、このことがかつてベストセラーになった『NOと

言えない日本人』という特性の元凶になっていると考えられます。日本人が傍目を気にするのは定住しているからで、定住していないヨーロッパ人はあまり気にしません。日本でも都市部ではそういう傾向が表れています。引っ越しの際も挨拶しない、隣の人が誰かも知らないとかね。

しかしながら敗戦後、とりわけ昭和30年代後半からの高度経済成長期を契機として日本の狭小なムラ社会は音を立てて崩れだし、今では山村や諸島などの遠隔地にごく僅かに残るだけになりました。しかも、そのムラ社会は人口も数人ほどになって崩壊寸前の憂き目にあっています。そして若者は仕事や進学のために都市に流出し、残っているのは高齢者ばかりでしかも一人暮らし。今では山間部の遠隔地ではガスや水道、電気、公共交通といったインフラも維持できないところもあるのです。

■都市部は顔の見えない社会に変容

一方、東京や大阪などの都市部には人口が集中してマンション暮らしが一般的になり、隣同士でも挨拶もしないというのが現状です。要するに昔ながらの顔の見える社会から、顔の見えない社会に変容してきたのです。また、最近では強盗や強盗殺人や振り込み詐欺といった凶悪犯罪が多発しています。これらの事件の加害者はみなSNSなどで知り合った初対面の者たちがグループで犯罪を犯すのですが、

その上には首謀者がいて、彼らもまた顔を知らずに指令を出しています。彼らにとって顔の見えない社会はまさにパラダイスと言って良いでしょう。引っ越した際に家をきれいに掃除していくのは日本人だけらしいです。外国人に家を貸していた知り合いがいるのですが、外国人が出て行ったあとトラック3台分のごみがあったそうです。

かつての日本人は顔の見える狭い社会に窮屈さを感じながら暮らしていました。しかしその窮屈さに耐え、倫理、道徳などの秩序の整った社会でそれに従って生きていけば幸せな生涯を送ることができたのです。もちろん、顔の見える社会にも多くの問題は横たわっています。しかし、その問題点を丁寧にひとつひとつ排除、あるいは改革して折衷案のようなものを構築することはできないでしょうか。顔の見える社会が崩壊したことによって都市に人口が集中して顔の見えない巨大社会が登場しました。この巨大社会が崩壊すれば世界の終わりのような状況が訪れることがあり得るのです。

今はお寺もやりにくい時代になってきたようです。知り合いの住職によると、顔見知りのお父さんがなくなり、四十九日の法要をやったところ、1万円だけ置いていったので、「二度とうちでやらないでくれ」と言ったそうです。まあ常識的には10万円でしょうから、お坊さんもやってられないですよ。そういう常識が全く分からなくなっているのです。

余談 私の母親の三回忌に母親の友だちとその息子が参列しました。法要の後、料理屋で精進落としをして引き出物を出したのですが、二人とも手ぶらでした。ほかの人はほぼ一万円ずつ包んでいましたけれど。誰かに聞いたらしく、一週間後にその息子が来て「この間は大変申し訳ありませんでした」と言って五千円を置いていきました。

4. 宗教以前の信仰に生きる日本人

■ごちゃ混ぜになっている「神道」の解釈

6世紀の中頃（538年）に仏教が伝来する以前、日本人は古くから津々浦々に鎮座する日本の神々を信仰していました。一般には日本の神々に対する信仰を「神道（しんとう）」と言っています。神道という言葉はすでに記紀など記されていますが、全国各地にまつられている神々に対する信仰と「神道」とは全く異なるのです。日本では共同体（ムラ）で農作業などを共にしていた人が亡くなると近くの山の麓に葬られ、その魂は長きにわたって山中をさまよった後に山頂から昇天して神になると考えられていました。これが時を定め、あるいは臨時に山頂に降臨しムラビトに五穀豊穡や除災などの恩沢をもたらしてくれるのです。この神が氏神（うじがみ）とよばれ、この氏神とムラビトの間は氏神・氏子の関係で結ばれていました。このような日本独自の宗教は、仏教やキリスト教のように仏典や聖書を持たず、現在も神社で行われているように無言で平身低頭して柏手を打つ程度です。

この宗教の根底にはアニミズム（精霊崇拜）とシャーマニズム（呪術）という極めて原始的な信仰形態が基盤になっています。このような宗教以前の信仰の起源は恐らく縄文時代にまで遡り、稲作が始ま

った弥生時代に盛んになったと考えられています。現在も各地の神社で行われている信仰形態はアニミズムとシャーマニズムに基づく極めて素朴な宗教以前の信仰なのです。神社の木や岩にしめ縄が張られていてそれを神と仰ぐとか、田んぼのあぜ道に割りばしを刺したような「御幣」が地の神様を表しているというのもアニミズムですね。卑弥呼は呪術を巧みに操って政治を行いました。平安時代に入ってきた密教も呪術です。それ以前の日本では日本的密教のような呪術がずっとありました。日本人は呪文が大好きで、「ちちんぷいぷい」や「あっかんべー」なども呪文のひとつです。

■権威の挽回を図って作られた「神道」

一方、「神道」は政治的意図に基づいて作られたもので、神社の素朴な信仰とは異なります。室町時代に天皇の権威が急速に衰えを見せると、伊勢神宮の権威も衰退しました。それに伴って先ず伊勢神宮の権威回復のために提唱したのが伊勢神道です。これは格下に見られてきた外宮の神官が『神道五部書(しんとうごぶしょ)』という神道に関する教義書を捏造してその権威の挽回を図ったものです。またこの時代に京都の吉田神社の宮司・吉田兼俱(かねとも)がやはり教義書なるものを捏造して吉田神道を立ち上げました。ある時、吉田神社の神前の松の木に天照大御神(あまてらすおおみかみ)が飛来して元宮殿(げんくうでん)という六角形の形をした独特の本殿の中に入っていき、その後、次々に神々が松の木に飛来して元宮殿に入ったところで兼俱は扉を閉め、日本中の神々はすべて吉田神社に鎮座していると主張したのです。

そして、江戸時代になると伊勢神宮は大衆化してもはや皇室の宗廟(そうびょう)としての権威は全く影を潜めました。それに伴って各地で儒学者や国学者、公家などが教義書を捏造して独自の神道を旗揚げしたのです。公家の吉川惟足(これたり)が立ち上げた吉川神道、仏僧だった山崎闇斎(あんさい)が提唱した垂加神道(すいかしんとう)、そして、幕末の国学者・平田篤胤が捏造した唯一神道(ゆういつしんとう)など多岐にわたります。

■軍国主義の温床となった「国家神道」

しかし、何といたっても極めつけは明治以降の「国家神道(こっかしんとう)」です。国家神道は国家主義、国粹主義に基づく極めて政治的色彩の強いもので、天皇を神聖にして不可侵の存在として国家と臣民(しんみん=国民)が一丸となって新国家を建設することを強要したのです。その結果、国家神道は軍国主義の温床となり太平洋戦争勃発の原動力になりました。そこで、敗戦後はGHQのいわゆる神道指令によって国家神道は解体されたのです。マッカーサーは神道指令を出して、日本の神社をすべてなくし、日本の共通語を英語にするつもりでした。しかし日本人は語学習得能力が低いいため英語教育に失敗し、神社も全くつぶれませんでした。

5. 論理的思考が苦手な日本人

■宗教や作法に形から入る日本人

日本人は論理的に考えることがあまり好きではなく、それが日本にキリスト教が定着しない大きな理由です。日本のキリスト教徒は200万人ですが、中国は1億4千万人、韓国は1500万人。キリスト教は「初めに言葉ありき」とされ、キリスト教を勉強しようとする牧師さんに「じゃあこれを読みなさい」と聖書を渡され、「ああもう結構です」となっちゃう。日本人は仏教や神道に形から入るんです。念仏や念仏踊りが大好きです。お茶や生け花にしても形から入る。形に非常にこだわる民族ですね。そういう点がロシア人と似ています。ロシア人が一番嫌いなのがドイツ人です。「あいつら理屈ばかり言っている」と。ドイツにはカントやヘーゲルなど偉大な哲学者が多いですが、ロシアにはあまり有名な哲学者はいません。その代わり文学者はプーシキン、ゴーリキー、ゴーゴリー、チェホフ、ツルゲーネフ、ドストエフスキー、トルストイなど枚挙にいとまがない。バレエ、オペラ、サーカス、アイスダンスなどのレベルも非常に高いですね。彼らは雄大なロシアの大地で春を待ち、短い夏を楽しみ、秋の紅葉を愛でて冬の降雪や結氷を恐れつつ、燃え上がるペチカの火に暖をとりながら昔話や民謡を楽しみに長い冬を過ごしたのです。ロシアは民話の宝庫で、そのような物語の中から繊細で雄大なロシアの文学が生まれてきたのです。革命後のことですが、ロシアの田舎町に住む高齢の女性が、民話を6千も暗

記していて、公演すると満場の喝采を浴びたそうです。

■情緒的な面で優れている日本人とロシア人

日本も万葉集から始まって、古今集から芭蕉の俳句。絵画も日本画という独特の世界があり、能や狂言、舞踏、演劇も高度で情緒豊かな芸術です。論理的に考えるよりも、情緒的な面で優れているのです。そんな日本人も明治以降は特に外国人に対して憧れとコンプレックスを持っていました。白人のことを「外人さん」と呼ぶほどですからね。弥生時代以降に建築や仏像などに高い知識と技術を持ってやってきた中国人や朝鮮人にも、やはり憧れとコンプレックスを抱きました。ロシア人の場合はフランスに対する憧れとコンプレックスがありました。上流貴族はフランス語で会話をして、フランス料理を食べ、フランスの調度で飾り付けるなど、すべてフランスの慣習にのっとっている。そのくせ自分たちの民族に誇りも持っていて、すぐに「わがロシアは！」と言います。

6. 連帯責任を重視してきた日本人

■個人主義の欧米人は人の目を気にしない

日本人はずっと連帯責任というものを重視してきました。ムラで共同作業をしていたころの習慣として板についているのです。個人というものはまったく埋没しています。昔はよく「女、子どもは」という言い方をしていました。子どもに対し「このガキが」と言ってみたり。今言うとお変ですね。これに対し欧米人は個人主義です。人の目を気にしない。夏目漱石は個の確立を強く主張しましたがけれども。日本人は集団の中に納まっているぶんにはいいけれど、そこから出ようとするとお変なことになる。小説家や画家たちは近所で悪口を言われる。太宰治や志賀直哉は今でこそ文豪と言われていますが、当時はろくなことを言われず、人間のくず扱いをされました。二葉亭四迷は小説家になろうとしてらお父さんから「お前なんかくたばってしまえ」と言われ、それをペンネームにしました。

■日本の封建制度の根本は御恩と奉公

ヨーロッパでは日本の鎌倉時代の時期に封建的師弟関係が出来上がっています。そして君主と家来との関係は完全な契約でした。主君が家来に対して約束を破ると、家来は契約を破棄してほかの主人のところへ行くことができ、また複数の主人と契約を結ぶこともできたのです。日本では契約というのはあまり定かではなく、御恩と奉公の関係で封建制度が成り立っていました。「奉公させていただきます」とか「御恩がありますから」とかよく言いましたね。今でも「部長にさせていただきます」とか言いますが、別にさせていただいたわけではなく、自分の実力でなったと思うのですが。スポーツの世界、例えば陸上競技では日本人はマラソンなどの個人競技より、リレーや駅伝のほうが好きなんです。みんなで勝ち取り、うれし涙にくれるというのが理想的なシナリオなのです。外国人は個人競技が圧倒的に好きですね。こういうところにも民族性が影響していると考えられます。

7. 日本の文化に影響を与えたものとは？

■独自の理論の構築は少ない日本人

フランスの哲学者ジャンジャック・ルソーの『社会契約論』の抄訳『民約論』を著した中江兆民は「日本には哲学がない」と言いました。日本には古くから仏教や儒教が伝えられて最澄や空海をはじめとする学僧によってその思想や哲学が盛んに研究され、その注釈書や独自の思想を展開した「論書」も多く残されています。また、近世になると蘭学者などの医学や自然科学が伝えられ、その研究に専念し杉田玄白のように成果を上げるものもありました。しかし、主に外から入って来た実証的な学問を応用して暦法や医学、地図など実用的なモノ作りに成果を上げたのであって、独自の理論を構築することは少なかったのです。歴史をたどってみると日本人が独自の理論を構築したというのは少ないです。もともと国学というのは論理的ではなく、論理的なものは儒学の論理を引用しているんです。その儒学だって大して論理的ではなく、結構簡単なことを言っています。本居宣長は「万葉集は素晴らしい」などと言っていますが、何が素晴らしいのか立証していません。

日本語はボキャブラリーがものすごく少ないです。源氏物語には「いとおかし」とか「もののあわれ」

とかが頻繁に出てきますが、文脈によって意味が違うので、前後関係から判断しなくてははいけない。それが源氏物語が難しいと言われる理由のひとつです。明治以降、哲学や宗教の分野で外国から新しい言葉がどんどん入ってきました。今でも新しい言葉の多くは横文字ですよ。何とかジーズとかよく分かりませんが。どうせ日本語では複雑な思想を表せないから、黙って理解し合おうという感情があったのではないのでしょうか。

■お彼岸は祖先信仰に基づく日本独特の行事

日本は6世紀に仏教が伝えられ、何でもかんでも仏教の影響を受けたとされています。しかし、お盆とお彼岸は仏教の二大行事と言われているようですが、お盆はインドにはなく中国発祥の行事です。お彼岸はインドにも中国にもなく、日本独特の行事なのです。鎌倉時代に日本にやってきた中国の禅宗の僧侶は手記の中で、お彼岸行事について驚きの目を見張っています。仏教伝来前の弥生時代から、日本人の信仰の基盤は祖先信仰でした。お彼岸にお墓に行くのも、そこに先祖がいるからです。日本人は何かにつけ「ご先祖さまが」と言いますものね。

ところでお盆は7月と8月がありますが、みなさんはどちらでしょうか。中国には元々、上元（じょうげん）、中元（ちゅうげん）、下元（かげん）を総称した三元（さんげん）というのがありました。上限はお正月の1月15日、中元はお中元で7月15日、下限は七五三で10月15日です。そしてお盆を中元のころと定め、仏教行事として定着しました。しかし、明治6年に政府が新暦を採用すると、新暦の7月15日ごろは農作業が残っていてお盆の行事を行うのが難しいということで、関西を中心に8月15日ごろにしようということになったのです。

■日本を熟知すると立ち位置が分かる

仏教とか儒教で説明されている日本の文化、その核になっている日本独自のものを見ていくと、日本人の民族性が良く浮かび上がってくると思います。外国人は自国の歴史や民族性についてよく知っています。以前知り合ったイラン人はイスラムの神話をとうとうと語り、最後にその子孫が自分なんだと胸を張って言いました。それを聞いて私は「自分にはできないな」と思いました。古事記や日本書紀をとうとうと語ることはできるけれど、天皇の子孫が私だなんて言うことはできないなと。海外に行って外国人と話し、「お前の国はどうなんだ」と聞かれると全然答えることができないとよく聞きます。でもそういうことが良く分かっていると、世界の中での自分たちの立ち位置が分かり、次代に向かってどういう風に行動すればいいのかが分かってくると思っています。

【質疑応答】（抜粋）

■日本語は語彙が多いか少ないか？

Q 日本語は語彙が少ないということですが、私は逆に語彙が多いと思います。例えば「私」を表すのは英語では「I」ですが、日本語では「私」「小生」「手前」などいろいろありますよね。

A それは人によって違って、特に外国語系の研究をしている人は語彙が多いと結構言っています。それと、日本語には概念的な言葉を指す言葉が少ないと思います。

■「神さま、仏さま、稲尾さま」は神仏習合？

Q 日本人の多くの方が自らは無宗教だと思っているそうですが、各宗教の信徒の総数が総人口を超えるとのデータもあるそうです。先生は信仰の定義についてどうお考えでしょうか。

A 日本人は確たる信仰心を持っていませんが、全く無宗教かというところではありません。例えば道端に石仏があると多くの人が手を合わせ、お稲荷さんがあるとお賽銭やお菓子をあげたりします。別に何々宗というわけではないけれど、そこに手を合わせるというのが日本人の信仰形態なのです。ライオンズの稲尾投手が活躍したころ、「神さま、仏さま、稲尾さま」と言ったように、日本人は神仏がそろっていないと気が済まない。今でも古いお宅には仏壇と神棚の両方があります。関西に行くと井戸には井戸の神さま、台所の釜には荒神さまと、家中にいろんな神さまがいます。そういう信仰は「日本教」と言ってもいいのではないのでしょうか。

瓜生 中（うりゅう なか）先生のプロフィール

1954年5月17日、東京都生まれ。

日本の歴史家、宗教学者。早稲田大学文学部卒業。

専攻は東洋哲学（インド哲学）。文学修士。

（著書）

よくわかる浄土宗他6シリーズ（角川ソフィア文庫）

よくわかるお経読本（角川ソフィア文庫）シリーズ

仏教、神道、寺・仏像、インドに関する書籍（PHP研究所 NHK出版など）多数出版

（近著）

「教養としての日本人論」（角川出版）

古代から根付く習俗や、神道・仏教などの信仰伝統にまつわる知っておきたい知識を徹底解説。

さらに、日本人が懐き続けた異国への憧憬や、明治維新と近代の戦争などから日本人の内面を深掘り。

（ご参考）

知識ゼロからのお寺と仏像入門（幻冬舎）

仏像はここを見る 鑑賞なるほど基礎知識（祥伝社新書）

知っておきたい仏像の見方（角川文庫・角川ソフィア文庫）